

発	達	心	理	学	用	語	講	座	(	K	式	編	)										
新	版	K	式	発	達	検	査	を	め	ぐ	っ	て	そ	の	8								
																			大	谷	多	加	志

今号から少し趣を変えることにしました。これまで連載しながらふと“私は誰に向けてこの原稿を書いているのだろう”と思うことがありました。発達検査に携わる方ではないとイメージしにくいような検査場面での出来事を書いているときもあれば、検査をしている人なら「何をいまさら」と思うようなごく当たり前のことを書いているときもありました。当初、「ともすれば批判や誤解を受けやすい“検査”について、少しでもどのようなもので、どのように考えているのかを知ってもらえれば」という思いで執筆を始めましたが、徐々にこの点への意識が薄れていたようです。力量からすると多少大それた目標ではありますが、検査を知らない人にも、検査に携わる人にも読む価値があるものを目指していきたいと思えます。そこで考えたのが、この「発達心理学用語講座」というテーマです。

この連載を始める少し前まで、「そだちと臨床」(明石書店)という児童福祉の専門誌の編集員をしていました。編集員の多くは児童相談所などで心理臨床に携わる大ベテランの方で、私は後から機会を頂いてご一緒させてもらっていたというのが実情でしたが、毎回の編集会議や、その中での議論、児童福祉の今日的な話題とそれをうま

く切り出して語ってくれる執筆者探し、原稿が届いた後の校正作業…と、私にとってはそれまで経験したことがないことばかりで、とても刺激的な日々でした。雑誌は2012年に休刊となり、現在は雑誌で扱っていた様々なテーマについて、単行本としてまとめ直す作業が進行中です。

その雑誌の中に、「たとえ話で納得!発達臨床心理学用語講座」というコーナーがあり、個人的に愛着を持っていました。発達心理学の領域で使われている色々な専門用語がありますが、何となく理解していても改めて「それってつまりどういうこと?」と問われるとうまく答えることが難しい言葉も少なくありません。そうした発達心理学用語を「たとえ話」を使って「なるほど!」と理解できるように説明しようというのが、このコーナーのコンセプトでした。ちなみに愛着がある理由は非常にシンプルで、編集員になってから毎回短いながらも原稿を書かせてもらっていたことです。

今回からはその体験を再現して、K式発達検査にまつわる「発達心理学用語」を「たとえ話」を通して紹介していこうと思います。

今回取り上げる用語は「標準化」と「図と地」の2つです。

## ①標準化

先日スーパーに買い物に行った時のことです。店内に入ると奥に大きく「サンマ 2尾 150 円！」と貼ってあるのが目につきました。誘われるように魚売り場へと向かい、近くで見ても思わず「う～ん」とうなりました。確かにサンマが2尾パックになっているのですが、どう見ても平均的なサンマよりも小ぶりで鮮度もよくない感じです。「これで150円か…」としばし考えた後、「これは決して安いとは言えない」と判断し、魚売り場を離れました。

こうしたことは買い物をしている中ではよくあるかと思います。買い物をする時には「お買い得かどうか」が重要なのですが、それを判断する要素がいくつかあります。1つは値段です。また鮮度や大きさも重要です。つまり、2匹150円が安いかどうかを判断するには、平均的な販売価格や大きさ、鮮度の見分け方等についての知識が必要になります。加えて、販売価格の相場は、時期によっても異なりますのでそれも考慮しないとイケません。

子どもの発達を理解する眼を養う時も、必要なことは基本的に同じです。何度も買い物に出かけ、売り場で色々な野菜や魚などを見る中で「お買い得度」を見る眼が養われるように、たくさん子どもたちと日々出会う中で「発達」を見る眼も養われていくわけです。ですから、経験豊富な発達相談員の方は、発達検査を実施したり子どもとの個別的な関わりを持たなくても、集団遊びの様子を観察するだけで子どもの発達状態についてある程度の見立てを行うことが可能であったりします。しかし、乳

幼児から成人に至るまで様々な年齢の子どもたちの「発達」を見る眼を養うことは容易ではありません。また、買い物が「サンマ」だけで終わらないように、子どもの発達アセスメントにおいても、一面的ではなく、認知や言葉、運動、対人など多面的な発達理解が必要です。そこに「発達検査」の出番があります。

発達検査が受ける誤解の1つに、検査項目の適用年齢を作成者が恣意的に決めていると思われている、ということがあります。具体的に言うと、ある課題について「〇歳くらいで通過する課題」と設定されていることに対して「想定している年齢が高すぎる（あるいは、低すぎる）」という意見を耳にすることがあります。実際にはこれは誤解で、各検査項目をどの年齢に設定するかは恣意的な判断ではなく、「標準化」という手続きを経て決められています。

「標準化」とは、色々な月齢・年齢の子どもたちの検査課題に対する反応を数多く観察してデータを蓄積し、子どもたちの標準的な発達を知り、発達状況を判断する目安となる尺度を作成することです。先ほどの買い物の例であれば、近隣店舗の様々な商品の販売価格を調べ上げてリスト化するようなもの、と考えてもらえればよいかと思います。そのリストで「平均的な価格やサイズ」や「鮮度の見分け方」がわかれば、買い物に不慣れな方でも「お買い得」を判断する目安にできるはずです。またデータが蓄積されてくると、単に1つの商品の値段や鮮度による比較に留まらず、「A店は日用品は高いけど、生鮮品は安くて鮮度もいい」とか、「B店は全般に高めだけど、外国の調味料など、他の店にない品揃えがある」

「C 店は品質も値段も普通だけど、月に 1 度のセール日は文句なしにお買い得！」といったように、お店の個性のようなものが見えてくるかもしれません。このように、たくさんのお店を見ていく中でそれぞれの店舗の個性が見えてくる感覚、これが子どもの発達特性が見えてくる時の感覚と、ちょっと似ているのではないかと思っています。このように多くの子どもたちから「目安」となる平均的な発達の姿とその幅を教えてもらうのが、「標準化」という作業です。

そして、せっかく収集したリストも、ずっとそのままでは意味がありません。定期的に各店舗の販売価格等の再調査を行う必要があります。時には新たな商品の調査リストに加えることも必要になるかもしれません。このようなリストのメンテナンス作業が「再標準化」です。発達検査、知能検査では 15~20 年ごとにこの作業が必要とされています。

また、子どもの発達を知るためには、色々な工夫が必要です。「発達」は「価格」や「サイズ」と違って、簡単に数値化できるものではありませんので、「発達」を的確に捉えることのできる検査項目が必要です。数多くの子どもたちの反応を蓄積する中で、「発達」を評価するにふさわしい検査項目だけが厳選されていくのです。この時、用いる検査の用具や手順なども厳密に定められる（標準的な手続きが決まる）わけですが、驚くべきことに 100 年前にビネーやゲゼルが考案した検査用具と手順が、現在の新版 K 式発達検査においても使われています。ビネーやゲゼルの着眼点や発想がいかに優れていたかが、改めてうかがえる事実だと思えます。

## ②図と地

ルビンの杯という有名な図があります。白黒の図で、中央に白く杯が浮かんでいますが、黒い部分に眼を向けると今度は向かい合った人の顔が見えるというものです。この時、杯を見ている時は、向かい合った人の顔を見ることはできません。逆に向き合った人の顔に意識を向けると、杯は見えなくなります。見ているものの方が「図」となり、他のものは「地」になって背景に沈みます。これが「図」と「地」です。

日常場面を例に考えてみましょう。

キッチンからおいしそうな匂いが漂ってきます。

食卓の上に目を向けると、お皿から湯気が立ちのぼっているのが見えます。

食卓に近づいてお皿の中に目をやると、中身がポトフであることがわかりました。早速スプーンを手にとると、皿を持ち上げ、スプーンで皿の中のポトフをすくいました。

この時、意識する対象である「図」は次々と移り変わっています。最初は食卓の上から「皿」を図として浮き上がらせました。次に皿の中身に目をやると皿は背景に沈み、中身のポトフを図として見ます。そして食べようとして皿を持ち上げる際は再び皿が図になりますが、皿を手にとるとすぐに皿の中身に意識を移し、ポトフを図にしながらスプーンを近づけていくわけです。

何でこんな当たり前のことを説明しているのかと思うかもしれませんが、でも「容器とその中身を区別して捉えること」は生まれながらにして可能だったわけではないのです。つまり「図と地」を判別する力も「発

達」の過程の中で獲得されたものなのです。

新版 K 式発達検査の 0 歳児（0 ヶ月から 12 ヶ月まで）を対象とした検査項目の中に、容器の中にある物を取り出すという課題があります。この課題を生後半年くらいの子どもに提示すると、容器の中の物は一切気にするそぶりもなく容器だけを扱い続ける場合があります（わざわざ目の前で容器の中に入れて見せても、です）。図と地の判別を当たり前に行い、必要に応じて瞬時に切り替えができる大人にとっては想像がしにくいかもしれませんが、容器とその中の物をそれぞれ別の物として区別して捉えることがまだ難しいのです。

また、図と地を区別することが、生得的な力ではなく、生きていく中で獲得してきた力であるとするならば、当然それを失うこともあります。以下は、脳梗塞によって高次脳機能障害になった方の体験です。

白い紙を目の前に広げられて、私は描きはじめた。

「あー、違う違う」

私には紙と、その下の机の境界線が見えなかった。全部、ひとつの平面に見えた。この大きな画用紙に書いていいんだと、のびのびペンを走らせた。

しばらくして、油性のペンが画用紙をはみ出し、病室の机にも線を書きなぐったことを自覚した。

「今度は紙だけに」と再び試みても、私にはその境界線がまったく理解できなかった。

『壊れた脳 生存する知』 2009 年 山田規畝子  
角川ソフィア文庫

この例を「図と地」の観点から考えたのは、私の勝手な発想です。本の中ではこの症状は「視覚失認」として「見たものを脳が正しく理解できない」ために生じていると説明されていました。しかし「どのように正しく理解できない」のか、ということを考えて時に、この「図と地」の判別の困難さとしても理解することができるのではないかと思ったのです。つまり、図として扱うべき画用紙と、地として捉えるはずの机との判別ができなくなっているのではないかということです。

発達を考える時、様々な力を獲得する途上である子どもの時の感覚や意識は、大人の感覚からは想像しにくいところがあります。大人にとっての「当たり前」を疑うこと。ある研修で学んだ言葉ですが、子どもの発達をありのままに理解するために、とても重要な視点だと思っています。

## 引用文献

- ・山田規畝子 壊れた脳 生存する知  
2009 年 角川ソフィア文庫

## バックナンバー

- 第 10 号 発達検査でわかること
- 第 11 号 通過・不通過
- 第 12 号 解釈・見立て・所見
- 第 13 号 検査手続き
- 第 14 号 導入
- 第 15 号 発達検査でわかること②
- 第 16 号 発達検査のもつイメージ